参考資料

おかあさんの気持ち

ワークシート ⑦-2

わたしは、３歳９ヶ月になる男の子と、１歳３ヶ月になる双子の女の子のお母さんです。

初めておなかに赤ちゃんがいることがわかった時、とても嬉しかったのですが、あまり実感がわかず、なんとなく不思議な気分でした。「本当におなかの中に赤ちゃんがいるの？」

でも、すぐに全く存在感のない我が子を思いやるようになります。「重たいものは、持っちゃいけないんだ。」とか「今日からは絶対走っちゃいけないんだ。」とか「転ばないように気を付けなくちゃ。」なんていろいろなことが頭の中をかけめぐります。そんなふうにちっちゃい命を守ろうとする気持ちは、お母さんになりたてほやほやでも持っているのです。

それからしばらくして、すぐに赤ちゃんが自分の命を主張し始めました。『つわり』と喚ばれる体の変化です。頭痛、吐き気、めまい、食欲不振など、症状や程度は人によって様々ですが、わたしの場合は吐き気がひどく、食べ物を食べられないのはもちろんのこと、どんな姿勢をとっても気持ちが悪くて、夜も眠れなくなってしまいました。水分をとっても吐いてしまうほどで、「このままでは、赤ちゃんが死んでしまうかもしれない！」と思い、病院に駆け込みました。そのまま即入院。入院したからといってすぐによくなるわけでもないのですが、２週間ずっと点滴で体に栄養を入れていたので、とりあえず赤ちゃんは大丈夫なのだとホッとしました。赤ちゃんは「おかーさーん、げんきだよーーー！」って、合図を送っていただけなのかもしれないけれど、わたしにとっては、とてもとてもつらい日々でした。

つわりが治まると安定した状態がしばらく続きます。日に日に大きくなるおなかを眺めながら思うことは、「とにかく元気で生まれてきてほしい。」ということだけ。食事に気を遣い、赤ちゃんのためによいといわれるものは、嫌いなものでも我慢して飲み込み、「出産大百科」なんて本をよーーーく読んで、おなかの中の赤ちゃんのことについて研究したり、男の子の名前と女の子の名前をいっぱい考えたりして過ごしていました。まだ目の前にいないのに、すべてが生まれてくる赤ちゃん中心の生活。家族中がウキウキして、徐々に巨大になる私のおなかをながめている毎日でした。

そして出産間近、少しずつ不安がつのってきました。「『お産』っていったいどんなものなんだろう？？」本を読んでみたり、母親教室でいろいろ教えてもらったりするけれど、やっぱりわからない・・・。

「陣痛ってどのくらい痛いの？」「何時間で生まれるの？」「赤ちゃん、ちゃんと産声をあげるかしら？」心配なことしか頭に浮かんできません。毎日、お産はいつくるんだろうと、どきどきしていました。

予定日に近い病院での検診の日、「まだ生まれそうもないなぁ。」と先生に言われ、がっかりして家に帰り、「いつ生まれるのかなぁ？」と思っていたその日の夜、突然赤ちゃんが包まれていたはずの水が体の外にサァーっと流れ出ました、『破水』です。お産は陣痛から始まるものと思っていたわたしは予想もしなかった展開に焦りました。電話ですぐ連絡をとり、車ですぐに病院へ。そのままお産が始まりました。

はじめは少しおなかが痛む程度だったのに、時間が経つにつれて徐々に強い痛みになっていきます。痛くて痛くて涙が出てくるのに、何時間たっても赤ちゃんは出てきてくれません。「がんばって！！」と声をかけられても、「もうがんばれないよ～」と弱気な声。その時、助産婦さんが小さな小さな赤ちゃんを抱いて、わたしのいる部屋に入ってきました。１日前に生まれたばかりの赤ちゃんを見せてくれたのです。「赤ちゃん、ごめんね。一緒に頑張ろう。」心の中で赤ちゃんと励まし合って痛みに耐えます。「がんばってぇーー！」助産婦さんの声に助けられながら時間がたっていきました。ほんぎゃ～、うぎゃ～、うぎゃ～！「元気よ！」ホッとして、ドッと疲れが出たような気がしました。

やわらかくて、こわれそうで、とってもあったかい、ほんわかした小さな命。これ以上大切なものはこの世にありません。我が子を抱く手に伝わる不思議にズシリとくる重み。「これが命なんだ。」その時の感触は、今でも忘れられません。